

---

# 交錯する世界

如月弥生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交錯する世界

### 【Zコード】

N4065BA

### 【作者名】

如月弥生

### 【あらすじ】

ある世界の、とある少女は、大切な友達のために時を遡る。ある世界の、とある少年は、大切な相棒のために死線へ飛び込む。これは、そんな2つの世界が、交錯する物語。この物語は、どこへ向かうのか。

この小説は、魔法少女まどか「マギカ」と、TRPG「ダブルクロス」のクロスオーバー作品です。  
不定期更新です。

## プロローグ（前書き）

なんか小説書いてみたくてやってしまった。  
駄文だと思いますが、読んでくださると嬉しいです。

（ダブルクロスというのは、ファーリースト・ミニコーズメント・リサーチ（F · E · A · R · ）が出版しているTRPG作品の一つです。まどマギと設定が似ていると言われていたので、合わせて見ました。）

おやじへ不定期更新になると想われます。

## プロローグ

「また・・・・・・・・助けられなかつた・・・・・・・・・・・・」

弱々しい声が響く。

その声の主である黒髪の少女は、泣いていた。

周囲には、まるで戦争でも起こつたかのような惨状が広がっている。

そんな中、少女は独り泣いていた。

やがて少女は立ち上がる。

その瞳に再び決意を秘めた焰が灯る。

そして、少女は意を決したように傍らの宝石に触れた。

それと同時に少女の服装は変化し、その左手には中央に砂時計の付いた円形の盾が装着されていた。

(次こそ・・・・・次こそ必ずあなたを救つてみせる・・・・・)

盾に手を当て、回転させる。

瞬間光が少女を包み、光が晴れると、少女の姿は忽然とその場から消えていた。

東京近郊、美傘市。

再開発によつて近代的な街になつたその場所の中心街で、一つの戦争が行われていた。

原型も留めず破壊された建物、地に伏し動かなくなつた人、地に穿たれたクレーター。

そんな惨状の中、既に入外の姿に変化した男と、10代半ばの少年と少女が対峙していた。

「ツ…………」

男は、もはや言語ですら無い叫びを上げる。

その叫びに呼応するかの如く、地面は裂け、衝撃波が周囲を凧いだ。並の人間が受ければまず命はないであろうそれを受け、少女を庇つた少年の腕がもぎ取られる。

しかし、数秒と経たないうちに腕は元通りに復元され、僅かな傷を残すのみとなつた。

リザレクト。

彼ら超人オーヴァードのみが持つ人外の再生能力だ。

「唯、大丈夫？」

受けた傷を癒しながら、僕は傍らにいる相棒、滝沢唯の安否を確認する。

オーヴァードならリザレクトできるし、そもそも僕が庇つたので傷ひとつ無いはずだが、念のためだ。

「うん。侑くんは？」

「僕も、問題ないよ

敵の動きに気を配りながら、目を合わせお互ひの無事を確認する。

状況は、最悪だ。

先程からこちらも攻撃を当ててはいるものの、致命傷には程遠い。対するこちらも攻撃を防いでいるものの、侵食率的な消耗が激しい。

このまま戦えば一人共死ぬかジャーム化するかの一択となる。しかも、UGNからの救援はおそらく間に合わない。こちらには敵を一撃で葬れる技があるが、おそらくあの衝撃波のようなものに阻まれる。

まさしく、四面楚歌。

だが、僕の頭の中には、一つだけ、たった一つだけこの最悪な状況を開ける術が浮かんでいた。

(それしか………ない。)

決意とともに、口を開く。

「落ち着いて、聞いてくれる？」

自分でも驚くほど掠れた声が出た。

「・・・な、何・・・？」

その声から、何かを感じ取ったのか、唯も震える声で言葉を返す。

「このままじゃ、二人共・・・・・死ぬ」

「だから、僕がアイツを捕らえる。その間に唯はアレを使って」

「それはっ・・・・！」

僕の言葉に、明らかに狼狽える唯。

それに構わず、僕は続ける。

「このままだと、手遅れになる。・・・・・大丈夫。絶対僕

は生き残る。」

この会話を続いている最中にも、化物の破壊は止まらない。

「・・・・・・・分かった。・・・・・でも！ 絶対！ 絶対

死ないでね！ 私を、置いて行かないでね！」

「うん。約束するよ。絶対、帰ってくる。」

決意を込めて、そう返す。

「じゃあ、行くよ！」

僕のその声を合図に、僕は化物の元へ駆け、唯は能力で長弓ジャームをそのまま現出させる。

「 シシッ！！！！！」

叫びと共に、射出される衝撃波。

その直撃を受け、全身が悲鳴を上げるも、スピードは緩めない。

「はっ！！」

高速移動によつてもとの数秒で敵に肉薄した僕は、その勢いのままエネルギーを発動させる。

ダメージを与えるのが目的じゃない。

（僕の目的は・・・・拘束！！！）

瞬間、巨大な砂の茨が鍊成され、僕もろとも敵を拘束した。

「 ！？」

まさか自分ごと拘束するとは思つていなかつたのか、すでに理性もないはずの化物の顔が歪む。

しかし、もう遅い。

既に、唯の準備は終わつてゐる。

しかも、この茨は使用するのに接敵する必要がある代わりに、絡みつかれた相手は体が硬直し動けなくなる特別製だ。本来ならば自分が拘束するなんてしないのだが、理性を失つてゐるとはいえ、思考能力を持つ敵なので、この策を使う他無かつた。

「行くよ！！」

唯の声と共に、最強の一撃が放たれる。

僕は、ギリギリのタイミングまで待ち、矢の直撃を確信すると同時に茨を解除し後方、即ち唯の攻撃の範囲外へと跳ぶ。

全ては、生き残るため。  
99%無理でも、1%に縋りついで悪あがきを敢行する。

だがそんな悪あがきを嘲笑うかの様に、閃光が僕の視界を覆つた。

## プロローグ（後書き）

まじめやちやんと見てないせいがなんかつら覚えだ・・・・・・。  
多少設定やセリフが違っているのはあまり気にしないでください。  
では、感想待っています。

## 登場人物設定（前書き）

今回は設定を投下します。  
ネタバレを含むので、お嫌いな方はスルーしてください。

## 登場人物設定

### 主人公設定

名前：御堂 侑

性別：男

年齢：14

ブリード：トライ

シンドローム：モルフェウス&ソラ里斯&ノイマン

能力 武器作成…ナイフからガトリングガンまで基本なんでも作れる。銃器は、弾薬も生成可。

精密射撃…ノイマンによる完璧な拳動と、ソラ里斯による神経回路強化で、完璧な射撃を可能にする。

幻覚…ソラ里斯能力で幻覚物質を作り出す。

砂の茨…拘束用に、砂で創りだした茨。棘から体を硬直させる薬物を出す。

備考 UGNに所属していたチルドレン。実は、ソラ里斯とモルフェウスのかみ合わせによって、彼の空想が現実になる、という特殊能力「タイム＆アゲイン2nd」（2ndなのは、過去に同じ能力があつたため）を持っている。（本人は能力の存在すら知らない）

平行世界であるまどマギの世界に来た時、彼の家が存在したのは、彼が無意識下で、「家に戻りたい」と願つたため。基本制御不可。（自分の意志ではまだ不可能）

その危険性故に封印が施され、世界を移動した際に使用可能に。（自分の意志ではまだ不可能）

体内に、レネゲイドを活性化させる賢者の石が埋まっている。これを使用することで、一瞬だけエフェクトの出力を最大まで引き上げられる。

このように、生来凄まじい力を内包していた為、同じく特殊な力を持つ滝沢唯とチームを組んでいる。

（一緒に管理するために上層部が決定した）

戦闘スタイルは、大量に練成した武器で次々と攻撃し、止めに迫撃砲やらバズーカ等大威力の攻撃を叩きこむ。

容姿は、女顔。しかも、髪は長髪（唯の趣味）なのでもはや女性にしか見えない。

UGN美傘支部内でも勘違いが多発している。

### 登場人物紹介

名前：滝沢唯

性別：女

年齢：14

ブリード・ピュア

シンドローム・バロール

能力 時間転送… 能力で作成した矢を起点に、時間流を変化させて対象を過去に送る。

備考 時間転送という凶悪な能力を持っていたため、友人が出来ず、

そんな中初めて友人になってくれた御堂侑に対しては知らず知らずのうちに依存してしまっている。

容姿は、ほぼまどかと同じ。

直接戦闘能力はさほど高くない。

## 第一話 平行世界（前書き）

第一話、出来上りました。  
楽しんで読んで頂ければ幸いです。

# 第一話 平行世界

体が重い。  
思考が安定しない。

今何が起きてるんだ?

・・・・・ どうでもいいか、そんなこと。

今は、とりあえず。

視界が、再び暗転した。

卷之二

寝てしまっていたようだ。

「そつか・・・・・僕は・・・・・」

あの攻撃に巻き込まれたのか。

寝ぼけた頭が、意識がはつきりするにつけ、回転しだす。

幸い命はあつたらしいが、あの攻撃の意味は破壊ではない。あの矢を起点として時間を巻き戻し、対象を過去へと送る。それがUGNでも極秘扱いの能力を持つオーヴァード、滝沢唯の真

骨頂だ。

おそらく僕はかなりの時間を吹き飛ばされたはず。多分、生物が生きられないような時代へと。

そこまで考えた時、気づいた。

( · · · · · · 天井?)

僕の視線の先には、どこにでもありそうな木造建築の天井があつた。

（どうだ？ うどい……）

慌てて部屋を確認すると、あることに気がついた。

僕の部屋

その一部屋は業が主んでいた家の裏室

「夢・・・・・才チ・・・・・・・?」

それに気づいた瞬間、僕は驚愕することになる。

「レネゲイドウイルスが・・・・・・ない！？」

そう。オーヴァードに力を与えるウイルス、レネゲイドが、大気中に一つもないのだ。

• • • • • • •

この瞬間、僕は迷わず能力を使用した。  
プロジェクト

を、《インスピレーション》。

ノイマンシンドロームに分類されるエフェクトであり、思考能力を一時的に増幅させ、あらゆることを推理するエフェクトだ。

これを使用した結果、僕は更に驚愕することになる。エフェクトによつてもたらされた回答は、

『この世界は、自分がいた世界ではない、いわゆる並行世界というものの』

だった。

「並行・・・・・世界・・・・・？」

自分のエフェクトだというのに、僕はこの結果を信じられなかつた。それも無理ないだろ？ 起きていきなりあなたは平行世界にいます、と言われて信じるほうがどうかしている。

しかし、エフェクトを使ってしまった以上信じざるを得ない。それほどまでに僕は《インスピレーション》を信頼していた。

「おいおい・・・・・ビックリしたことなんだ・・・・・・・？」

考えられるのは、時間転移の際に何かが起きた・・・・・といつところだが、それを確かめる術はない。

「はあ・・・・・・」

思わずこぼれるため息。

ただ、来れたということは、帰る術があるかも知れない。

そう思いとりあえず現状を確認すべく寝室を出、リビングへ移動する。

そこでふと見た窓の外、そこには見慣れた美唄市の姿はなく、見知らぬ景色が広がっていた。



## 第一話 平行世界（後書き）

今回使用されたエフェクト  
『インスピレーション』  
ノイマンシンドロームのエフェクト。  
あらゆる疑問に答えを出せる。（考えもしないことなどなくし  
か分からぬ）

いかがだったでしょうか？  
感想待っています。

## 第一話 「見滝原」（前書き）

第一話、出来上がりました。  
書き溜め・・・・・しといたほつがよかつたですかね・・・・・。

## 第一話 「見滝原」

ふと見た窓の外、そこには見慣れた美唄市の姿はなく、見知らぬ景色が広がっていた。

「…………え？」

（美唄市じゃ……ない！？）

何度見返しても、現実は変わらない。

また『インスピレーション』を使おうかとも思つたが、あれは数日に1、2回程度しか使えない。

「はあ…………さつきから驚きっぱなしだな…………」

とにかく、ここは美唄市ではない。

ならばここは何処だと場所を特定できるようなものを探し、軽く街を見渡すと道路の付近にあつた標識が視界の端に映つた。

そこに書いてあつた地名は、「見滝原」。

「見滝原…………？」

そんな地名あつただろうか？

いや、ここは平行世界なのだ。自分の知つている情報が通用しない可能性だって十分ある。

自分の知識ばかりに頼るのはやめたほうがよさそうだ。

「ここので、僕はあることに気がついた。

（やういえば…………僕の戸籍つてどうなつているんだらう〜）

普通に考えて、別の世界から移動してきたのだからあるはずがない。しかし、それを言つてしまえば今ここにある家だつてあるはずがない。

何があつて何がないのか、それをはつきりさせる必要がある。

「よし……ならまづは……」

元の世界へ帰る手段を見つけるため、少年は一步を踏み出した。

簡潔に言つて、この世界に「御堂 侑」という人間は存在しなかつた。

とこつわけで、ソラリスによる暗示や催眠で「御堂 侑」の戸籍を作らせてもらつた。

オーヴィアードにとつてこのくらいは朝飯前だ。

その結果、年齢的には中学校に通つている歳だということもあり、近くにあつた中学校へ通うこととなつた。

とこつわけで、明日から「見滝原中学校」へ行かなければならぬ

わけだ。

まあ、向こうで忙しく仕事をしたからマサナガ学校に行ったことがないため、楽しみではある。

「今日……もつ纏るか

文書が一冊潰してしまったし、明日から学校もあるので寝るといふ。

ベッドに倒れ込み、意識が急速に闇に落ちてこった。

**第一話 「見滝原」（後書き）**

次回から、原作に入っていくと思います。

## 第三話 見滝原中学校（前書き）

なんとか書きあがりましたー。  
受験中なので出来は微妙です・・・。  
それでも良ければどうぞ。

## 第三話 見滝原中学校

「失礼します。」

そう言いつつ、職員室のドアを開く。

「あら、転校生の子？」

「ええ、御堂です。よろしくおねがいしますね」  
顔に笑みを浮かべながら軽くお辞儀をする。

社交性、というのは大事だ。

いろんな局面で役立つ。

「そう。じゃ、あっちの先生のところに」

「分かりました」

入り口近くにいた教師に言われ、自分の担任教師の前にせりてくれる。  
そこには、なんかどんよりした空気を発している女性がいた。

（えっと・・・この人だよね・・・僕の担任・・・）

「卵の焼き加減がなによ・・・そんなのどうだつていいじゃな

い・・・」

氣のせいではなくやはり負のオーラが出ている。

「ええと・・・すいません・・・」

僕が軽く声をかけると、女性ははつ、と頭を上げ、うあ、と声を上げた。

「えっと・・・」

「・・・あ、きみが転校生の子ね？」

（どうやら復活したらしく。）

「はい。そうですが・・・」

「じゃ、後もう一人ね」

（・・・もう一人転校生が居るのか・・・こんな微妙な

時期に転校が重なるのも珍しいな。）

そんなことを考えていると、職員室のドアが開き、外から黒髪の綺麗な少女が入ってきた。

おそらく、先生が言っていたもう一人の転校生なのだろう。少女は、僕の方のちらりと見て、その端正な顔に深い困惑の色を浮かべた。

それが気になつた僕は、とりあえずどこかで会つたのかを聞いてみることにした。

「えつと・・・・・・どこかでお会いしましたか？」

「・・・・・・あ、『めんなさい』。他にも転校生がいるとは聞いていなくて」

僕の問に対して、そう答える少女。

ただ、僕はなんとなく彼女が嘘を言つてゐるよつに見えた。

向こうも僕の視線に気づき、少し顔を逸らす。

やはり何か隠している。

・・・・・が、これ以上追求しても意味はないか。

「じゃあ二人共、教室まで案内するからついてきてね」  
お互いつつ妙な雰囲気になつていたので助かつた。

もしかするとこの雰囲気に助けを入れてくれたのかもしれないが。  
どちらにせよこの雰囲気から逃げたいのはやまやまなので、大人しくついていくことにする。

その後ろから先程の少女もついてくる。

「じゃ、私が読んだら入つてきてね」

そう言って教室に入つていく先生。

先程の少女と二人きりになるが、特に会話はない。

「「ホン。今日は皆さんに大事なお話があります。心して聞くよつ  
に！」

まあ、おそらく僕等のことだろつ。 転校生だし。

「田玉焼きとは、固焼きですか？ それとも半熟ですか？ はい、  
中沢君！」

……………はい？

「ええ！？ えつと……………どつちでも良いんじゃないかと……  
・・・」

驚く中沢くん。 安心して。 それが普通の反応だ。

「その通り！ どつちでもよろしい！ たかが玉子の焼き加減なん  
かで女の魅力が決まると思つたら大間違いですっ！」

どうでもいいですが指し棒折れますよ先生。

「女子の皆さんは、くれぐれも「半熟じやなきや食べられない」と  
かぬかす男とは交際しないように！ そして、男子の皆さんは絶つ  
対に玉子の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと！  
……………ああ、さつきの負のオーラの原因はそれか。

「はい。あとそれから、今日は皆さんに転校生を紹介します  
「そつちが後回しかよつ！」（そつちが後回しかよ……………）

なんかハモつたね……………。

「じゃ、暁美さん、御堂くん。いらっしゃーい」

「「はい」」

呼ばれたので、少女……………暁美さんに続いて教室に入る。  
とこうかここに来るまで名前知らなかつたな。

「はい！ それじゃあ自己紹介いつてみよつー」

やたらテンションが高いな……………。

「暁美ほむらです。よろしくお願ひします」

「御堂侑です。よろしく」  
挨拶を終え、軽く暁美さんの方を見るとある一点を凝視していた。  
何事かと僕がその方向を向くと、ここに居る筈のない彼女に似た少  
女がいた。

滝沢唯。僕のたつた一人の相棒であり、何より大切な親友。

そして、一昨日から会えなくなつた人。

そんな彼女と瓜二つの少女が、僕の視線の先に確かに存在していた。

息が詰まつた。呼吸が安定しない。

なんで？ここに？唯が？支離滅裂な思考の中、思い出す。

ここは、『平行世界』。同じ人間がいてもおかしくないし、そも  
そも他人の空似である可能性もある。

きっと、唯ではない。そもそも唯なら僕がいれば少しづらいは反  
応するだろう。

しかし、あの娘は僕の顔を全く知らなかつた。つまり・・・・・・  
別人。

(そり・・・・・・だよね。)

いるはずがないのだ。

だからこそ、僕は帰らなければ。 今も唯は待つてる。 キツヒ、  
僕を。

なら、僕は・・・・・・・

その時、教室中が拍手で満たされた。  
それと同時に思考を現実に引き戻し、慌てて例の少女から視線を逸  
らす。

何秒見ていたかはわからないが、突然見知らぬ人から凝視されてい  
い気分ではないだろう。

そんなこんなで、朝のホームルームは終了した。

同時に、僕と暁美さんの元に集まつてくるクラスメート達。  
どうやら転校生が物珍しいらしい。

僕が適当な応対をしていると、青い髪をショートカットにした少女  
と、先程の唯に似た少女が僕の前に現れた。

「えっと・・・・・・何か?」

途端に押し寄せたたくさんの感情を噛み殺し、笑みを作つて話しか  
ける。

「いやー? 転校生その二がさつきまどかをじーっと見てたからね  
ー。もしかして、惚れちゃった?」

「ちょっと・・・・・・・さやかちゃん!」

茶化すようにそういう青髪の少女に、慌てて返す唯に似た少女。  
どうやら、青髪の方が、さやか、で唯に似ている方が、まどか、と  
言つらしき。

「あー・・・・・・すいません。 知り合いに似ていたもので。」

名前から、やはり唯とは別人だと判断し、期待こそしていなかつた

が若干落胆しながらそう返す。

「へー…………。あ、もしかして転校生その二の彼女だったりする？ その娘」

「転校生その二はやめてください…………。」「

といふか彼女？ 何を馬鹿な。

任務でそれどころではなかつたし、そもそも近くにいた異性が唯だけだつたし。

…………やばいなんか悲しくなつてきた。

「ん？ あー、『めん』『めん無神経』だったね」

勝手に納得している青髪少女。一体何を勘違いしたんだ……。

「ま、これからひじく……えーと……『や

かちゃん……御堂くんだよ』 御堂一『

名前覚えてなかつたのか……。

僕が、よろしく、と言おつとしたその時。

「鹿目まどかさん、貴方がこのクラスの保健係りよね

突然のその声の主はもう一人の転校生、暁美ほむらだつた。



## 第三話 見滝原中学校（後書き）

原作が頭に入っていないのでセリフに苦労しました・・・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4065ba/>

---

交錯する世界

2012年1月14日21時54分発行